

## 大学を拠点とした子育て支援事業の活動報告と評価

大林 陽子<sup>1</sup>, 岡田 由香<sup>1</sup>, 緒方 京<sup>1</sup>, 神谷 摂子<sup>1</sup>,  
志村千鶴子<sup>1</sup>, 佐久間清美<sup>2</sup>, 金尾 洋治<sup>3</sup>, 高橋 弘子<sup>4</sup>

### College-centered Child-rearing Support Activities —A Report and Evaluation—

Yoko Obayashi<sup>1</sup>, Yuka Okada<sup>1</sup>, Miyako Ogata<sup>1</sup>, Setsuko Kamiya<sup>1</sup>, Chizuko Shimura<sup>1</sup>, Kiyomi Sakuma<sup>2</sup>,  
Yoji Kanao<sup>3</sup>, Hiroko Takahashi<sup>4</sup>

本学では平成19年度から22年度まで、母性看護学教員を中心に看護大学の資源を活かして、大学周辺に生活する就園前の児とその養護者を対象に、大学の体育館を開放して育児支援事業を実施してきた。事業内容は、助産師（教員）・看護師・保育士が常駐する中で親子が自由に遊んで過ごす子育てひろばや親子のふれ合い・学び合いを目的とした親子サロン・育児講座の開催、本学看護学部学生および看護学大学院生の教育・研究の場の提供であった。4年間で子育てひろばの開催は161回にのぼり、1回あたり平均60組以上の親子が参加する安定した事業となった。また、養護者の子育てひろばに対する満足度は高く、養護者は安全で気軽に専門家に育児相談できる環境を評価し、同時に大学の取り組みを地域貢献ととらえていた。さらに、学生・院生の実習および調査研究の場としても活用し、大学を拠点とした子育て支援事業の特徴が明確化された。

キーワード：子育て支援、大学の地域貢献、大学の地域開放、教育・研究

#### I. はじめに

本学では、平成19年11月から平成22年度まで子育て支援事業（名称「子育てひろば もりっこやまっこ」、以下「子育てひろば」）を実施してきた。子育てひろばは、教員、学生、保育士、地域の子育て支援関係者の連携のもと、大学周辺に生活する就園前の児とその養護者を対象に、本学体育館を地域に開放して行った育児支援活動である。

事業目標は、主として「育児支援を目的とした大学の開放による地域貢献」、「学生への生きた教育現場の提供」であった。事業内容は、①助産師（教員）・看護師・保育士が常駐する中で親子が自由に遊んで過ごす子育てひろばの開催、②親子のふれ合いや学び合いを目的とした親子サロン・育児講座の開催、③本学学部学生および大学院看護学研究科（高度実践コース 助産師養成課程）院生の教育・研究の場の提供、④子育て自助グループへの活

動場所の提供、⑤地域自治体の子育て支援事業への参画であった。

事業に参加する親子は年々増加し、大学における育児支援活動として定着してきたため、この活動実績をもとに平成23年度からは本学看護学部看護実践センターの地域連携事業として継続されることとなった。

今回、4年間の活動実績をまとめるとともに、事業に参加した養護者および実習学生への調査を実施し、事業の評価を行った。なお、平成19年度の事業の詳細については愛知県立看護大学紀要第14巻、平成20年・21年事業の詳細については愛知県立大学看護学部紀要第15・16巻を参考にされたい。

#### II. 方 法

これまでの活動実績は、事業の活動日誌から参加者数や居住地、子どもの年齢などを個人が特定されないよう抽出し、集計した。また、事業の評価は、各年度末の1・

<sup>1</sup>愛知県立大学看護学部（母性看護学）、<sup>2</sup>愛知県立大学看護学部（地域看護学）、<sup>3</sup>愛知県立大学看護学部（生涯スポーツ）、<sup>4</sup>天使大学大学院

2月の子育てひろばに参加した養護者に無記名自記式質問紙調査を行い、得られたデータを分析した。質問紙の内容は、参加したきっかけや理由、参加してよかったことなどで、平成20年度からは子育てひろばの満足度や大学を地域に開放したことに関する項目を、平成22年度からは子育てひろばに参加して養護者・子どもが変化したことなどの項目を追加した。さらに、平成21・22年度に母性看護学実習に参加した学生（卒業生を含む）156名を対象に、実習での学びや子育てひろばの意義やあり方について無記名自記式質問紙調査を行い、得られたデータを分析した。

倫理的配慮として、養護者および在学生には、調査参加への自由、参加しない場合も不利益を被らないこと、プライバシーの保護、データの厳重管理などについて口頭と文書で説明し、回収箱への投函をもって同意を得られたものとした。また、卒業生には、同様の配慮に加え、回答した質問紙の返送をもって同意を得られたものとした。なお、これらの研究計画は愛知県立大学研究倫理審査委員会の承認（22 愛県大管理第2-27号）を得て実施した。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 活動実績

##### 1) 年度別活動実績

4年間で子育てひろばを通算161回開催した。このうち、自由ひろばは144回、育児講座は14回、親子サロンは13回であった。4年間の総参加者数は16,000名を超え、各年度の参加者数は平成20年度以降、4,000名を超えた。このうち、1回あたりの参加者数の平均は124名で、毎

約60組の子どもと養護者が参加したことになった。養護者の中には母親に加えて父親や祖父母の姿もみられた。また、参加した子どもの年齢の内訳は、各年度とも1歳代が半数を占め、次いで、2歳代、0歳代の順であった（表1）。

参加者の居住地は大学周辺地域が最も多く、平成22年度は守山区からの参加が61%で、このうち大学所在地の志段味地区は25%であった。次いで春日井市が26%で、守山区と春日井市をあわせると9割近くを占め、例年と同様の傾向がみられた。

活動内容別の参加状況は、平成20年度以降は自由ひろばが最も多く、次いで親子サロン、育児講座の順であった。また、子育て自助グループ支援は平成20年度までは少なかったため、積極的に働きかけて活動場所を提供した結果、21年度は7回、22年度は10回に増加した（表2）。

子育てひろばスタッフの動員は、各年度とも本学母性看護学教員と大学周辺地域に在住する有償スタッフの保育士・看護師で7~8割を占めた。このうち事業活動が安定してきた平成21年度からは、地域の保育士・看護師が6割を占めていた。また、学生ボランティアは平成19年度58名、20年度38名、21年度20名、22年度27名であった。（表3）。

##### 2) その他の活動実績

###### (1) 教育の場の提供

平成21年度から学部4年生の母性看護学実習の一部である育児支援実習の一環として、学生が子育てひろばで実習した。さらに、平成22年度からは本学大学院看護学研究科（助産師養成課程）の院生（2年生）がウィメンズヘルス教育実践実習の一環として育児講座（2回）を

表1 年度別 子育て支援活動開催実績

単位：親子1組

	平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度	
開催回数	32回		50回		49回		30回	
参加組数（人）	546	(1192)	2608	(5532)	2757	(5856)	1948	(4225)
1回の平均組数（人）	17.1	(37.3)	52.2	(110.6)	56.3	(119.5)	64.9	(140.8)
午前の平均	19.7	(44.2)	80.1	(169.8)	72.4	(153.3)	91.4	(194.9)
午後の平均	13.6	(28.5)	30.6	(65.1)	39.4	(84.3)	38.5	(86.8)
参加した子どもの年齢								
0歳児	184	(28.9%)	561	(19.2%)	416	(13.5%)	319	(14.5%)
1歳児	315	(49.6%)	1574	(54.1%)	1590	(51.7%)	942	(43.0%)
2歳児	63	(9.9%)	663	(22.7%)	813	(26.4%)	688	(31.4%)
3歳児	73	(11.5%)	106	(3.6%)	233	(7.6%)	233	(10.6%)
4歳以上	1	(0.2%)	11	(0.4%)	18	(0.6%)	11	(0.5%)
参加した子どもの総数	636	(100.0%)	2915	(100.0%)	3074	(100.0%)	2193	(100.0%)

表2 年度別 活動内容別参加数

	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
開催回数	32回	50回	49回	30回
活動内容別	回 (1回の平均組数±SD)	回 (1回の平均組数±SD)	回 (1回の平均組数±SD)	回 (1回の平均組数±SD)
自由ひろば	22回 (17.1±12.1)	45回 (54.3±28.5)	43回 (59.3±26.2)	34回 (65.7±31.3)*1
育児講座	5回 (15.2±6.5)	2回 (26.0±8.5)	3回 (32.3±6.4)	4回 (49.0±45.5)*2
親子サロン	5回 (16.8±8.3)	3回 (36.3±21.0)	3回 (37.7±7.6)	2回 (88.0±42.4)*3
子育て自助グループ支援	2回	1回	7回	10回
ボランティア研修会	1回 (参加者15人)			

\*1・遊具・絵本を設置し、体育館の広いフロアを利用した自由な活動  
 ・ひろばスタッフによる育児相談を適宜受付  
 ・平成21年度～身体測定と育児相談を組み合わせ実施(月1回程度)  
 \*2・院生による「熱中症を防ごう!」,「始めよう! 親子のお口と歯の健康」  
 ・インストラクターによる「ベビーマッサージ教室」,「ベビーヨガ教室」  
 \*3・保育士・学生ボランティアによる「親子であそぼ」 ・体育教員による「体操しよう」

表3 年度別 ひろばスタッフの動員数

	人 (%)			
	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度
開催回数	32回	50回	49回	30回
母性看護学教員	105 (35.5)	206 (44.7)	103 (28.7)	41 (24.0)
地域看護学教員	18 (6.1)	-	-	-
保育士(有償)	108 (36.5)	164 (35.6)	183 (51.0)	83 (48.5)
看護師(有償)	0	40 (8.7)	41 (11.4)	16 (9.4)
ボランティア(無償)	65 (22.0)	51 (11.1)	32 (8.9)	31 (18.1)
内訳 学生(再掲)	58	38	20	27
一般(再掲)	7	13	12	4
延べ人数	296 (100.0)	461 (100.0)	359 (100.0)	171 (100.0)
延べ人数の平均	9.2	9.2	7.3	5.7

企画・運営した。その他、平成20年度からは看護学部主催の大学祭の中で、学生が親子で自由に遊ぶ子育てひろばを開催する際の遊具等の貸し出しを行い、当日は母性看護学教員が実施をサポートした。

(2) 研究の場の提供

本学学部学生や大学院看護学研究科(高度実践コース助産師養成課程)院生に、平成20年度2件、21年度2件、22年度2件の計6件、研究のための調査の場として提供した。

(3) 地域の子育て支援関係者との連携による活動

平成20年度から22年度まで、本学母性看護学教員が守山区子育て支援ネットワーク連絡会の委員および守山区子育て支援事業実行委員として、守山区主催の子育てひろば「もりやまっこ」の企画・運営会議に参加し、自治体の子育て支援関係者との交流や情報交換を行った。

平成20・21年度には、守山区志段味西地区の主任児童委員が開催する親子サロン(年2回)に母性看護学教員1名と学生7~8名で出前講師として出向き、母親を対象とした「子育て中の女性の健康」について講演を行った

り、学生が考えた手遊びを披露するなど、地域の母子と学生の交流を図った。

2. 子育てひろばに参加した養護者の質問紙調査の結果

平成20~22年度の3年間に、質問紙を425名に配布し、402名から回答が得られた(回収率94.6%)。このうち有効回答は389であった。

子育てひろばに参加する養護者は、子ども一人連れが最も多く、参加頻度は「月に1回」,「ほぼ毎回」の順に多く、両者で半数を占めていた。

子育てひろばに『参加したきっかけ』は、例年「友達の紹介」が8割近くを占めていた。

『子育てひろばに参加してよかったこと』は、「広い遊び場所」,「屋内の遊び場所」,「安全な遊び場所」,「遊具の充実」,「子どもと外出できるきっかけ」が上位を占めていた。

『子育てひろばに参加した理由』は、「広い遊び場所」,「子どもと外出できるきっかけ」の順に多く、次いで「安全な遊び場所」,「屋内の遊び場所」,「同年齢の子どもと

のふれあい」, 「子ども同士の出会い」が続いた。

『子育てひろばの満足度』は, 各年度ともに「大変満足」「ほぼ満足」をあわせて9割以上が「満足」と回答していた。その理由として, 「子育ての不安や悩みを直接専門家や学生に気軽に相談できる」, 「広い屋内で安全に遊べる」があがった。

『大学施設の地域への開放の評価』は, 各年度ともにほぼ9割が「たいへん良い」と評価していた。その理由として, 「大学の地域貢献自体が素晴らしい」, 「学生と出会え, 子どもも遊んでもらって嬉しそうだし, 学生の勉強にもなる」などの声が聞かれた。

『子育てひろばの教育・研究の場としての活用の評価』は, 「たいへん良い」が73%, 「まあまあ良い」が19%で, 両者をあわせて9割以上を占めていた。

『学生ボランティアの関わりに対する評価』では, 「たいへん良い」が55%, 「まあまあ良い」が33%で, 「あまり良くない」「よくない」と回答した養護者はいなかった。

『子育てひろばに参加して子どもが変化したこと』で, 養護者の半数以上が「あてはまる (あてはまる・少しあてはまるを含む)」と回答したのは, 「いろいろなおもちゃに興味を示すようになった」, 「親から離れて遊ぶことができるようになった」, 「友達に興味を示すようになった」などであった。また, 「ひろばで遊んだ後は機嫌がよい」, 「ひろばで遊んだ後はご飯(おっぱい)をよく食べる(飲む)」, 「ひろばから帰ってからよく昼寝をする」, 「ひろば

で遊んだ夜, よく寝るようになった」との回答もみられた。

『子育てひろばに参加して養護者が変化したこと』で, 養護者の半数以上が「あてはまる (あてはまる・少しあてはまるを含む)」と回答したのは, 「子どもの成長を確認できるようになった」, 「自分の子どもを客観的にみるようになった」などであった。また, 「ひろばのことをパートナーや家族と話すようになった」, 「ひろばのことを夫婦以外の家族と話すようになった」, 「ひろばの話題を友人とするようになった」などの回答もみられた。

その他, 子育てひろばに対する養護者からの自由意見として, 『大学の地域開放, 貢献に関すること』, 『ひろばの意義に関すること』, 『ひろばの開催に関すること』, 『ひろばの環境や遊具に関すること』があがった(表4)。

### 3. 母性看護学実習に参加した学生の質問紙調査の結果

質問紙は143名に配布し, 68名から回答が得られた(回収率47.5%)。

子育てひろばへの『参加頻度』は, 「実習のみ」が77%と最も多く, 実習後にも学生の3割がボランティアとして参加していた。

『子育てひろばで実習すること』について, 「今後も続けた方がよい」と回答した学生が8割を超え, 「3年前期までの授業(演習)に組み込んで欲しい」という回答も34%みられた。

表4 子育てひろばに対する養護者からの自由意見 (平成20~22年度 n=402)

『大学の地域開放, 貢献に関すること』	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学の施設を地域に開放してもらえるのは大変有意義</li> <li>・公園のないこの地域で看護大学の取り組みは素晴らしいと思う</li> <li>・行政でなく, 大学がこのような遊び場を提供してくれるのは大変ありがたく, 大学に親近感がわく</li> <li>・このような活動が他の地区にも広がるとよい</li> </ul>
『ひろばの意義に関すること』	<ul style="list-style-type: none"> <li>・育児が楽しいと思えるようになった</li> <li>・大学に来れば, 自分も子どもも何か変化がある(学べる)気がする</li> <li>・相談できる助産師さんもいて, 私自身の気持ちも楽になった</li> <li>・先生や学生さんに相談でき, 子どもにもやさしくなれるようになった</li> <li>・学生さんが遊んでくれる</li> <li>・たくさん同世代の子どもとふれあえる</li> <li>・保育士・助産師がもう少し話しかけてほしい</li> <li>・地域の高齢者にも来てほしい</li> </ul>
『ひろばの開催に関すること』	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開催日数, 曜日を増やしてほしい</li> <li>・開催日を増やし, 時間も長くしてほしい</li> <li>・有料になってもいいので, もっと多く開催してほしい</li> <li>・開催をホームページで公開してほしい</li> </ul>
『ひろばの環境や遊具に関すること』	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広いので子どもをのびのびと遊ばせられる</li> <li>・年齢に合った遊具がある</li> <li>・遊具もいろいろあるので, 子どもなりに遊び方を考えるようになった</li> </ul>

実習の感想として、母性看護学実習目標である『育児中の親子の状況や接し方の理解』の中で、養護者との関わりをとおして「子育ての楽しさがわかった」、「子育て中の親たちの気持ちわかった」、「親たちの子育てについての悩みがわかった」などの回答が多くみられた。また、『子どもの発達理解』については、「子どもの発育・発達が実際に理解できた」、「子どもの年齢に応じた遊びがわかった」との回答が多くみられた(表5)。

『子育てひろばの必要性に関すること』では、養護者との関わりをとおして「このひろばの必要性がわかった」、「親たちがこのひろばを必要としていると感じた」と、多くの学生が回答していた。このため、「住民に広報の必要があると思った」、「学内に広報の必要があると思った」などの意見も多くみられた。また、『子育てひろばの意義に関すること』として、地域の自治体が行うひろばとの違いを理解し、「子育て支援に看護職者が関わる意義がわかった」とする意見も多くみられた。このため、「大学がこのひろばを開催することの意義がわかった」、「大学と地域住民がひろばでつながっていると感じた」など、大学の地域貢献に関する認識をもった学生もいた。さらに、『子育てひろばに対する思い』として、「この活動を行っている大学のことを自慢したいと思った」、「この活動をしている大学の学生であることを誇りに思った」との回答もみられた(表6)。

最後に、『ひろばの継続について』は、「必要」と回答した学生が97%で、その理由として、「参加者に必要とされている(90%)」、「学生に必要な学びの場(61%)」、「大学と住民がつながるよい場(44%)」、「本学固有の魅力(40%)」と回答し、ほとんどの学生が子育てひろばの継

続を望んでいた。

#### IV. 考 察

##### 1. 大学の地域貢献としての事業の成果について

これまでに子育てひろばを4年間で通算161回開催してきたこと、1回の平均参加組数が年々増加し、平成22年度には60組を超え、この事業が地域の住民に活用され、定着してきた様子がうかがわれた。

養護者は、大学の体育館という広い屋内の安全な遊び場という環境を評価し、安心して子どもを遊ばせられる場として活用していたと考えられる。また、養護者の子育てひろばに対する満足度は高く、その理由として子育ての不安や悩みを専門家や学生に気軽に相談できると述べており、大学教員(助産師)をはじめとする専門職が常駐して育児相談に応じる体制も養護者の満足につながっていたと考える。この相談体制は看護大学の資源を活用した子育て支援事業の特色として整えてきたものであるが、これが地域貢献にもつながっていたと考えられる。今後もこの特色を活かして、地域住民への大学の知財提供の場としていきたい。

養護者は大学施設の地域への開放をよいことと評価し、自由意見として、子育て支援の少ないこの地域での大学の取り組みを高く評価していた。これは事業目標である「育児支援を目的とした大学の開放による地域貢献」になっていたと考える。その一方で、養護者からはひろばの開催回数を増やしてほしいという声が聞かれ、ニーズに十分応えられていない実情もある。養護者のニーズにこたえることも大切であるが、大学が行う子育て支援事

表5 育児中の親子の状況、接し方の理解 (n=68)

	(%)				
	とても そう思う	少し そう思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない
育児中の親たちとどう接すればよいのかわかった	14.7	51.5	20.6	13.2	0.0
子育ての楽しさがわかった	26.5	51.5	14.7	2.9	2.9
育児中の親たちの気持ちわかった	20.6	51.4	14.7	11.8	1.5
親たちの子育てについての悩みがわかった	25.0	44.1	13.2	16.2	1.5
子育ての大変さがわかった	51.5	36.8	8.8	2.9	0.0
親子のふれ合いが実感できた	54.4	33.8	8.8	1.5	0.0
子どもの発育が実際に理解できた	25.0	63.3	8.8	2.9	0.0
子どもの発達が実際に理解できた	27.9	55.9	14.7	1.5	0.0
子どもの年齢に応じた遊びがわかった	44.1	42.6	13.2	0.0	0.0
子どもにどう接すればよいのかわかった	26.5	61.8	8.8	2.9	0.0
子どもとふれ合うことができた	79.4	19.1	1.5	0.0	0.0
子どもをかわいと感じた	85.3	11.8	2.9	0.0	0.0
地域で子育てするイメージができた	29.4	53.0	8.8	8.8	0.0

表6 子育てひろばで実習したことについて (n=68)

	(%)				
	とても そう思う	少し そう思う	どちらとも いえない	あまり 思わない	全く 思わない
【子育てひろばの必要性に関すること】					
・子育て支援におけるこのひろばの必要性がわかった	66.2	29.4	4.4	0.0	0.0
・親たちがこのひろばを必要としていると感じた	77.9	20.6	1.5	0.0	0.0
・このひろばが親たちの情報交換の場になっているとわかった	76.4	22.1	1.5	0.0	0.0
・このひろばが親たちの学び合う場になっているとわかった	55.9	41.2	2.9	0.0	0.0
・この活動について住民に広報の必要があると思った	64.7	29.4	4.4	1.5	0.0
・学内に広報の必要があると思った	51.5	33.8	11.8	2.9	0.0
【子育てひろばの意義に関すること】					
・子育て支援に看護職者が関わる意義がわかった	38.2	51.5	5.9	4.4	0.0
・このひろばの育児相談の意義がわかった	35.3	51.4	11.8	1.5	0.0
・自治体の行う子育てひろばと大学のひろばの違いがわかった	11.8	58.8	19.1	10.3	0.0
・大学がこのひろばを開催することの意義がわかった	52.9	36.8	4.4	5.9	0.0
・大学と地域住民がひろばでつながっていると感じた	47.1	39.7	10.3	2.9	0.0
【子育てひろばに対する思い】					
・ひろばで実習できてよかった	73.5	20.6	5.9	0.0	0.0
・この実習は将来の自分の子育てに役に立つと思った	50.0	36.8	8.8	4.4	0.0
・この活動を行っている大学のことを自慢したいと思った	54.4	33.8	10.3	0.0	1.5
・この活動を行っている大学の学生であることを誇りに思った	41.1	35.3	20.6	1.5	0.0

業は教育研究の場であることを参加者に十分理解してもらえようような広報の工夫が今後の課題であろう。

実習学生は、養護者との関わりをとおして、「親たちがこのひろばを必要としていると感じた」と述べ、学生の9割が子育てひろばの継続が必要であると回答していた。この点からも子育てひろばは地域住民の育児支援となり、このひろばの提供が地域貢献となっていた様子がうかがわれた。

## 2. 大学の教育・研究の場の提供としての事業の成果について

平成21年度から本学学部学生の母性看護学実習の場として子育てひろばを活用した。実習した学生は、養護者や児との関わりをとおして「育児中の親子の状況や接し方を理解し、子どもの発達についても理解できた」と回答したことから、実習における学習効果が得られたと考えている。このため、実習の場としての子育てひろばの活用は、親子と接する学生への教育効果が期待でき、学生への生きた教育現場の提供となり得るといえる。また、本学学生・院生が養護者を対象とした研究調査を行い、学生たちは大学という身近な場所で、教員に即座に相談しながら安心して研究に取り組んでいる様子がみられた。そして、調査対象であった養護者も学生たちの研究の場としての活用をよいことと高く評価していた。実習や研究で活用できる場が学生・院生の身近にあることは、学

生の学習効果や学習意欲を高める意味でもよい影響があると考えられる。今後も参加者に十分な配慮をしながら、学生・院生の教育・研究の場として慎重に活用し、成果を還元していきたいと考えている。

以上より、子育てひろばの事業は看護大学の資源を活用した地域貢献として、また、学生・院生の教育・研究の場として活用した成果が明らかになったと考えられる。また、これらと共存しながら子育て支援を継続していく意義も明らかとなったと考えている。

## V. おわりに

この事業は平成19年度魅力あふれる大学づくり関連事業、平成20～22年度理事長特別研究事業の交付を受けて実施してきた。事業を始めてから4年が経過し、本学教職員と大学周辺の保育士・看護師スタッフが継続して携わり、子育て支援事業を軌道にのせることができた。平成23年度からは愛知県立大学看護学部看護実践センターの地域連携委員会が主体となり、愛知県立大学の教育・研究と地域への貢献の両立を目指す事業として継続されることになった。

これまでこの事業にご尽力下さいました関係者の皆様に深く感謝いたします。

## 参考文献

- 1) 岡田由香, 高橋弘子, 佐久間清美, 金尾洋治, 山口江利子, 神谷摂子, 緒方京, 志村千鶴子, 大林陽子: 大学を拠点とした子育て支援の取り組み—大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告—. 愛知県立看護大学紀要. 第14巻: 113-120. 2008.
- 2) 岡田由香, 高橋弘子, 佐久間清美, 金尾洋治, 神谷摂子, 緒方京, 志村千鶴子, 大林陽子: 大学を拠点とした子育て支援の取り組み—大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告2—. 愛知県立大学看護学部紀要. 第15巻: 33-38, 2009.
- 3) 岡田由香, 緒方京, 神谷摂子, 大林陽子, 志村千鶴子, 佐久間清美, 金尾洋治, 高橋弘子, 恵美須文枝: 大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性をはかる取り組み—大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告3—. 愛知県立大学看護学部紀要. 第16巻: 41-47. 2010.
- 4) 小川佳代, 榮玲子, 野口純子, 三浦浩美, 竹内美由紀, 舟越和代, 宮本政子, 大池明枝: 地域子育て支援事業の効果に関する研究—母親の親性の発達に影響する要因—. 小児保健研究, 69: 3: 432-437, 2010.